北　海　道　通　信　　令和８年６月12日　【金曜日】

上富良野高　薬物乱用防止教室

決して関わらないこと

旭川市立大・山田氏講演

【旭川発】上富良野高校（山内宣明校長）は5日、同校で薬物乱用防止教室を実施した＝写真＝。旭川市立大学保健福祉学部の山田直行准教授が講演。生徒は薬物乱用による症状や危険性などについて理解を深めた。

講演は、高校生を取り巻く禁止薬物の実態や成長期の体に受ける害を学び、様々な禁止薬物がなぜ違法なのか、興味本位で手を出してしまうとどのような危険があるのかをきちんと理解し、決して関わらないようにする姿勢を育成することが目的。

当日は、全校生徒66人が講演に耳を傾けた。

山田准教授は、たばこやアルコールといった身近な嗜好品が、さらに強力な違法薬物へと誘う「ゲートウェイドラッグ」になる危険性を指摘。「高校生で毎日喫煙や飲酒をする人のうち、一定の割合が違法薬物の乱用を経験している」という国内外の統計データを示した。近年問題視されている大麻のほか、アメリカなどで社会問題化している麻薬「フェンタニル」や通称「ゾンビたばこ」と呼ばれるエトミデートなど、最新の新型薬物の乱用実態を挙げて、危険が身近に潜んでいることを解説した。

また、大麻による妄想状態が凄惨な殺傷事件を引き起こした過去の裁判例を提示し、薬物使用に伴う精神異常の恐ろしさを説明。致死量がわずか2ミリグラムとされ、海外の若者の間で死因の1位になっているフェンタニルのまん延や、それによって不自然に体が硬直する姿を紹介し、安易な好奇心が死に直結することを示した。昨今国内の若年層で深刻化している、風邪薬をはじめとする市販薬の過剰摂取（オーバードーズ）にも言及。快感をもたらす脳内物質「ドーパミン」の作用から耐性が形成され、薬効が切れると深刻なうつ状態や強い自殺念慮に襲われるという依存症の負のスパイラルを、神経科学的な知見から詳細に解説した。

さらに、薬物依存症が「意志の弱さ」ではなく、脳の機能障害を伴う「病気」であることを説明。覚醒剤による逮捕者の再犯率が約7割に上るなど「一度依存すると、一生その病気と付き合わなければならない治療の難しさがある」と強調した。周囲の関わり方についても言及し、本人の薬物使用を結果的に手助けしてしまう「イネーブリング」と呼ばれる誤った支援を避けることや、専門機関へ相談することの重要性を伝えた。

最後に、代表生徒が「薬物の恐ろしさや自分たちにできる対策がしっかりと分かった。今後依存症にならないよう気を付けたい」などと謝辞を述べた。